

群 教 セ	E03 - 03
	平 18.232集

## 5・6年生をやる気にさせる小学校英語活動 － 学級担任が指導する国際理解を重視した活動の工夫 －

### （研究の概要）

本調査研究は、県内外の小学校英語活動の現状について調査し、国の動向等を踏まえつつ課題となる点を整理し、それらの課題の解決策について研究したものである。具体的には、3つの課題それぞれを解決するための基本的な考え方（コンセプト）に沿って活動展開例等を作成し、現状における望ましい小学校英語活動の姿と児童をやる気にさせる方策について提言するものである。

これが、これからの小学校英語活動だ！

#### 1 実践例「ニューヨークは今何時？」

「テレビでは、朝からニューヨーク Yankees の試合を放送しているけれど、アメリカ人は朝早くから野球をやっているの？」と、担任の T 先生が問い掛ける。「時差があるからだよ。」と答える児童。

しかし“What time is it in New York now?” という T 先生の質問に対して、児童は英語の意味は分かるものの、ニューヨークの時刻を答えることはできない。日本とニューヨークとの正確な時差については、分かっていないらしい。



<時差時計を使って各都市の時刻を調べるところ>

そこで登場したのが、「時差時計」。世界の都市の時刻が一目で分かるスグレモノ。「ニューヨークの時刻が分かった！」と感動する児童、あるいは、「なんで時刻が違うのだろう。」と疑問を抱く児童。遠く離れた外国の時刻を考え、それぞれの生活に思いを馳せることで、いろいろな都市の時刻を知ろうとする好奇心がふくらんできた。

そして、ニューヨーク以外の都市についても、

“What time is it in (都市名) now?” の表現を使って友達同士で調べていった。



<諸外国の時刻を尋ね合う児童>

活動の最後は、「...そうだね。よくいろいろなことに気付いたね。同じ地球でも、世界の人たちは、それぞれ異なった時間帯で生活しているんだね。だから、外国に電話を掛けるときなど、相手の国が今何時なのか考えてあげないと...。」という T 先生のまとめの言葉で締めくくられた。

#### 2 活動を支える3つのコンセプト

##### (1) 知的好奇心を刺激する

高学年の児童をやる気にさせるために、地球の自転や太陽との位置関係などについて興味をふくらませながら活動できるよう、日本とニューヨークの間の時差を題材として取り上げた。教室の中に時計があり、全員の児童が現在の時刻を知っている状況では、“What time is it now?” の表現を使う必然性がなく児童もコミュニケーションを図ろうとする意欲がわかないことが多い。一方、知的好奇心を背景に実際に分からない外国の時刻

を聞くことは、児童にとって数倍も新鮮だ。自分たちで作った時差時計を駆使して、生き生きと目を輝かせながら取り組んでいた。



<その他の教材>

## (2) 国際理解を重視する

T先生は、国際理解重視という考え方を十分に踏まえ、外国に電話を掛けたりするときなどは相手の国の時刻を配慮するという国際社会のマナーについて児童自身が気付くよう活動を進めてい

た。児童は、そうしたマナーだけではなく国と国との間には基本的に時差があることや、アメリカやロシアなどでは国内にも時差があり、そういった地域の人々は、日本に比べ時差を身近に感じながら生活しているということなどを理解した。

## (3) 学級担任が自信をもって指導する

児童の実態を最も的確に把握しているにもかかわらず、これまでの英語活動では、ALTの陰に隠れがちだった学級担任。現場の教師からは、英語指導の経験の少ない学級担任が自信をもって指導することは難しいといった意見も出されていた。


そこで、学級担任が一人でも指導できるように全ての発問や指示を明記した台本形式の活動展開例を作った。「単独で英語活動の指導をするのは今回が初めて。」という授業者のT先生だったが、初めてとは思えないような指導ぶり。もちろんT先生の力量があつてのことだが、授業後には、「活動のねらい達成に向けて台本のとおりに言えばよいので、とても指導しやすかった。」といった感想も得られた。

## 3 授業で使ったものはこれだ！

### (1) 活動展開例

学級担任が中心となって授業を行うことが可能になるよう、台本形式のものを作成し全発問や指示を細かく示した。

「ニューヨークは今何時？」(時差) 活動展開例				
【ねらい】				
コミュニケーション活動	いろいろな都市の時刻を聞いたり答えたりしながら、積極的に英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする。			
言語・文化の理解	時差があるために、世界の人々がそれぞれ異なる時間帯で生活していることや、東西に広い国では国内にも複数の時間帯があることなどを理解する。また、常にお互いの時差を考慮しながら、相手の時刻を考えて行動することは国際社会のマナーのひとつであることに気付く。			
【主な言語材料】				
・ What time is it in (New York) now ? It's (11:00).				
【準備】				
教師	時差時計、クリップ、ワークシート、「自由の女神像」の写真、「正時を示す時計」の絵			
児童	はさみ			
【展開】				
時間	活動内容 ねらい	留意点	教師の動き	予想される児童の反応
↑	1 英語であいさつをする。		1 元気よくあいさつをする。	

	<p>明るく元気な雰囲気を作る。</p>	<p>Hello, everyone. How are you?</p> <p>Hello. I'm fine. (good, OK, so so, tired, hungry,.....)</p>
5分	<p>2 「自由の女神像」がニューヨークにあることを知る。 ニューヨークに興味をもたせる。</p> 	<p>2 「自由の女神像」の写真を使って発問する。</p> <p>What is this?</p> <p>* すぐに答えが分からないよう、<u>少しずつ写真を見せていく。</u></p> <p>自由の女神</p> <p>Yes. Good. This is 自由の女神. Where is this? In Tokyo? In Osaka? In Australia?.....</p> <p>アメリカ</p> <p>America,.....good. Where is it in America? (アメリカのどこだと思う)</p>

(2) 指導資料

指導者用に国際理解との関わりや、各教科等との関連、言語材料の扱い方について解説した。

「ニューヨークは今何時？」 指導資料

【題材の概要】

「時差」は、高学年の児童にとって各都市の時刻に興味をもちながら、かつ「What time is it in ~ now?」の表現を使うことに必然性を感じながら学習できる題材である。多くの児童は、テレビの衛星放送をはじめ様々な場面を通して日本と外国の時刻とが異なることを知っている。本時では、児童が日常生活の中で最も身近に時差を感じる場面として、アメリカ（ニューヨーク）からの大リーグの衛星放送の例をあげている。時差時計を使って、ニューヨークと日本との時刻が異なることを理解させながら、地球の自転や太陽との位置関係などを背景に他の都市にも興味をもたせていく。また、広い国では国内にも時差があり、電話を掛ける際などにも相手の立場を考えなければならないことなどを理解させることができる。

【国際理解との関わり】

児童は、国によって「時差」があることを知り、世界の国や地域が日本人と異なる時間帯で生活していたり、ひとつの国の中にも「時差」が存在したりして、それが生活習慣にどのような影響を与えているのかを理解することができる。このことを通して、児童は、

世界にはいろいろな国や地域、様々な文化、価値観が存在することに興味・関心をもち、それらを尊重する心情や態度の素地を培っていく。

【各教科等との関連】

社会科・・・国土の位置、我が国と関係の深い国の生活

【題材内容との関連事項】＊学校の実態に応じて活用してください。

### <サマータイム>

緯度が高い国が、日照時間の長い夏の時間を有効に使うことを目的とした制度である。時刻を1時間早めることで、CO<sub>2</sub>の削減につながることから最近では環境問題の面からも注目されている制度である。また、北半球と南半球とでは季節が異なることから、例えばアメリカで実施していても、オーストラリアでは実施しないことなどにふれてもよい。日本は議論を重ねながらも、今のところ実施する予定はない。

### <日付変更線>

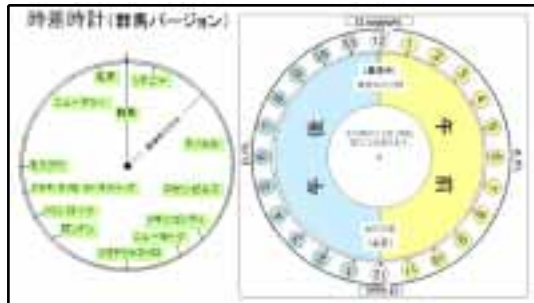
地球表面に引かれた架空の線で、北極から南極まで経度180度の海上に設けられている。旅行者が、この線を西から東に通過するときは日付を1日戻し、逆に東から西へ通過するときは日付を1日進めることになっている。日本は、日付変更線のすぐ西側にあるため、世界の中でも日付が変わるのが早い国になっている。

### <インターネット「世界の窓」の紹介> [www011.upp.so-net.ne.jp/web/cam.htm](http://www011.upp.so-net.ne.jp/web/cam.htm)

世界各地の映像（静止画像）をリアルタイムで見ることができるサイトである。児童は様々な都市の生の様子を見ることで、「時差」についてより身近なものとして実感できる。

(3) 時差時計、ワークシート、「自由の女神像」の写真、時計の絵。

調査研究の流れ



#### 1 本テーマを設定した経緯

平成10年に告示された学習指導要領で、「総合的な学習の時間」が導入され、横断的・総合的な課題の一例として「国際理解」が示された。その中で、外国語会話等を行うときの配慮事項が示されたことなどから、「総合的な学習の時間」の活動として「英語活動」を位置付ける小学校が全国的に増え、群馬県でも多くの小学校が「英語活動」に取り組むようになり、現在では全ての小学校で実施されている。

しかし、その実態は様々であり、それぞれの学校や自治体が独自の考え方で英語活動に取り組んだ結果、歌やゲーム、リズム遊び、実践的コミュニケーション能力の育成をねらいとした中学校の英語学習に近いものなど、活動の内容は多岐に渡っていた。

そうした中、平成13年に文部科学省から「小学校英語活動実践の手引」が出され、ねらい、指導上の留意点、扱う言語材料の例、実践事例などが具体的に示された。特に「ねらい」の中では、言語習得よりも、興味・関心や意欲の育成を主な目的とし、同時に、児童に負担感や英語に対する嫌悪感をもたせないようにするために、子どもにと

って身近な英語を教材化していくことが望ましいとされた。

また、こうした国の動向とは別に、英語を「聞く」、「話す」を中心とする言語習得を目的（スキル重視）とした市販教材も数多く出回るようになり、学校や自治体の中にはそれらを補助教材として採用するところも見られるようになってきた。

このように小学校英語活動は、「総合的な学習の時間」で扱う課題の中にある「国際理解」の一環としての取組を機に始まり、児童の外国の人に対する違和感を取り除くなど、それなりの成果をあげてきてはいるものの、学校現場では様々な方針や考え方で活動が展開されており、今なお方向性の定まらない状況が続いていることも事実である。

一方、中教審の「外国語専門部会」における審議の状況（平成18年3月27日）に目を向けると、今後の小学校英語活動では、言語や文化に対する理解に視点を充てた国際理解を深めることを重視した考え方に沿った活動が求められることが予想される。

そこで本チームでは、小学校英語活動の現状について、「全国の状況」「群馬県の状況」「国の動向」の3つの観点から調査研究を行い、望ましい小学校英語活動の姿について調査研究することとした。

## 2 調査内容

具体的な調査方法として次の方法をとった。

文部科学省が実施した各種調査の考察

- ・ 小学校英語活動実施状況調査（平成17年度）
- ・ 小学校における英語教育に関する研究開発学校の取組状況（平成17年度11月現在）
- ・ 構造改革特別区域研究開発学校設置事業における小学校の英語教育の取組状況（全55件）
- ・ 小学校の英語教育に関する意識調査（平成16年度）

中教審の「外国語専門部会」における審議の状況（平成18年3月27日）の解釈

群馬県内の市町村教育委員会への聞き取り調査

文部科学省への問い合わせ

先進校視察（昭和女子大学附属昭和小学校）

### (1) 全国の状況

ア 実施時数及び内容

平成17年度は、公立小学校の総合的な学習の時間において約8割の学校が英語活動を実施しており、特別活動も含め何らかの形で英語活動を実施している学校は93.6%に及んでいる。年間の平均授業実施時数は、学年が上がるにつれ増える傾向にあり、最も多い6年生では13.7単位時間である。また、英語活動を実施している学校のうち、97.1%が「歌やゲームなど英語に親しむ活動」に、94.8%が「簡単な英会話（挨拶や自己紹介など）の練習」に取り組んでいる。また、73.0%が「英語の発音の練習」を行っている。

### イ 意識調査の結果

4年生と6年生を対象に実施した平成16年度の小学校の英語教育に関する意識調査では、およそ74%の児童が「英語活動が好き」と答えている。しかし、裏を返せば残りの26%の児童は、英語活動が好きではないということにもなる。

### ウ 高学年に共通した課題

学年が上がるにつれ、次のような理由から英語活動に対する意欲が次第に低下していく傾向が見られる。

#### (ア) 発達段階に起因するもの

歌やリズム遊びなどの活動に対して「恥ずかしさ」や「照れ」を感じるようになる。

#### (イ) 内容に起因するもの

低学年から取り組んでいる英語活動の内容が歌やゲームなどに偏り、マンネリ化していることなどから、活動に対して「新鮮さ」が感じられなくなり、逆に「物足りなさ」を感じるようになる。

### エ 文科省指定の研究開発学校等の取組

文部科学省指定の研究開発学校や構造改革特別区域にある小学校では、「英語科」や「英語活動科」などの名称のもと教科として取り組んでいるところもある。これらの取組の特徴として、国際理解を深めることやコミュニケーション能力の育成を目的とした活動が多い点があげられる。一方で、6年生で中学校1年生の英語の指導内容を扱う、いわゆる「前倒し」の指導を行っているところもあり、学習内容が理解できないために英語が嫌いになる児童を生み出してしまった例もある。

#### (2) 群馬県の状況

##### ア 実施時数及び内容

平成17年度の小学校英語活動実施状況調査の結果、群馬県内の全ての小学校（340校）で英語活動が実施されていることが分かった。年間の平均では、低学年で8～9単位時間、中・高学年で13

～14単位時間程度実施されている。

また、活動内容に関わる実態としては、300校以上の学校が、「歌やゲームなど英語に親しむ活動」や「簡単な英会話（挨拶や自己紹介など）の練習」などの活動を取り入れていることが分かった。一方、「交流活動など実体験を通じて英語や異文化に触れる活動」については、学年が上がるにつれて取り入れている学校数が増えているものの、最も多い6年生でさえ122校であり、国際理解に関する活動を取り入れている学校は比較的小さいことが分かった。

#### イ ALTの活用状況

ALTの活用状況については、同調査の結果から、全学年を通して、英語活動の92.9%を学級担任が指導しており、そのうち76.0%の時間を市町村配置のALTとのTTで行っていることが分かった。見方を変えれば、ALTに対して依存している割合が高いことが言える。一部には、ALTの学校訪問があったときのみ英語活動を行ったり、TTでありながらも学級担任がほとんど指導に関わっていない現状も見受けられる。

#### ウ 各市町村における取組

県内の各市町村への取組調査の結果では、平成18年度の主な取組として、「年間指導計画や指導案の作成」、「ALTとのTTを円滑に進めるためのマニュアル作り」、「教材開発」の3つであることが分かった。なお教材の特徴としては、スキル面での効果をねらいとしている点があげられる。

#### (3) 中教審の「外国語専門部会」における審議の状況(平成18年3月27日)

中教審の外国語専門部会では、小学校英語教育の目標について主に次の2つの考え方を示している。

#### <英語のスキルをより重視する考え方>

小学校段階では、音声やリズムを柔軟に受け止めるのに適していることなどから、音声を中心とした英語のコミュニケーション活動や、ALT（外国語指導助手）を中心とした外国人との交流を通して、音声、会話技術、文法などのスキル面を中心に英語力の向上を図ることを重視する考え方。

#### <国際コミュニケーションを重視する考え方>

小学校段階では、言語や文化に対する関心や意欲を高めるのに適していることなどから、英語を使った活動をする事を通じて、国語や我が国の文化を含め、言語や文化に対する理解を深めるとともに、ALTや留学生等の外国人との交流を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、国際理解を深めることを重視する考え方。

外国語専門部会ではこれらの2つの考え方を総合的に勘案した結果、何のために英語を学ぶかという動機付けを重視することと、言語やコミュニケーションに対する理解を深めることで国語力の育成にも寄与するとの観点から、「スキル重視の考え方」の側面も考慮しながら、「国際コミュニケーションをより重視する考え方」を基本とすることが適当であるとする考え方を示している。

以上のことから、望ましい小学校英語活動とは次のように考える。

国際理解を深める活動を通して、英語を使うことに興味をもたせ、中学校から本格的に英語を学ぶことに対して意欲や動機をもたせるためのものである。

将来、英語を使っているいろいろな国の人々と交流するとき、お互いの国の文化を尊重し認め合ったり、自国の文化に誇りをもって接することができるような態度を育てるためのものである。

そして、こうした活動を行うためには、児童が積極的に周囲の人間とコミュニケーションを図ろうとする場面を作るとともに、外国の言語や文化を理解し認め合ったり、日本文化の良さを見直したりすることができるような内容を扱うことが求められる。

#### 3 調査結果から見える3つの課題

調査の結果から、小学校英語活動に関して様々な課題があることが分かった。そこで本チームでは、望ましい小学校英語活動を実践するために今後早急に解決していかなければならない課題を次の3点とした。

#### (1) 高学年児童の意欲の低下

前述の「全国の状況」で示したように、高学年

になるにつれ、児童の英語活動に対する意欲が低下していく傾向にある。

意欲が低下したままの状態  
で英語活動に取り組ませることで、多くの「英語嫌い」を生み出す危険性をはらんでいる。



### (2) 国際理解の視点が不十分な活動

現状の小学校英語活動では、スキルを重視した活動が主流となっており、言語や文化に対する理解をねらいとした活動は少ないということが言える。英語活動に意欲的に取り組んでいる学校や自治体においても、児童が生き生きと活動しているものの、国際理解の視点到け活動を行っている場合が多い。そのため、現場の教師にとって、「国際理解を深める英語活動」の授業をしっかりイメージすることが必要であると考えられる。



### (3) ALT任せの活動

国際コミュニケーション能力の育成という小学校英語活動のねらいを踏まえると、児童が英語を使って友達や教師、ALTなど多くの人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度が求められる。そうしたとき、一人一人の児童の能力や興味、児童相互の人間関係など、学級の実態を最も的確に把握している学級担任が積極的に指導に当たることが望ましいと考えられる。さらに、今後ある程度のまとまった単位時間数の英語活動を実践していく場合、学級担任が単独で指導しなければならない時間が増えることも予想される。

こうしたことから、今後は学級担任がALTに頼りすぎることなく、TTにおいて積極的に役割を果たしたり、単独で指導したりすることが強く求められるようになり、同時に、そうした指導が可能となるような活動例や教材等の開発が必要になってくるもの  
と考える。



## 4 課題を解決するための3つのコンセプト

「3」で述べた3つの課題を解決するためには、5・6年生の学級担任がすぐに使える活動展開

例、指導資料、その他具体的な教材を示す必要があると考えた。そして、それらを作成する上でのコンセプトについて、次のように考えた。

### (1) 知的好奇心を刺激する

児童が活動内容や新たに得られる情報に興味や関心をもち、知的好奇心を刺激されるような内容を取り上げるようにした。単に英語を話すことを目的とするのではなく、児童が興味のある知識や情報を得ようとする際に、必然性を感じながら英語を使うことができるような構成とした。

### (2) 国際理解を重視する

言語理解、文化理解といった国際理解の内容を十分に盛り込み、学級担任にとって国際理解を深める英語活動をイメージしやすいように配慮した。具体的には、世界各国の様々な文化を理解し、それらを認め尊重する心を育てたり、日本の文化に誇りをもちたせたりするような内容を扱うことで、国際感覚を身に付けた日本人を育成できるようにした。

### (3) 学級担任が自信をもって指導する

学級担任が積極的に個に応じた適切な指導・支援を行うためには、学級担任が一人で指導したり、TTにおいても中心的な役割を果たしたりすることが必要である。そのために、学級担任が自信をもって指導できる活動展開例等を作成することにした。

#### ア 活動展開例

学級担任が、児童に対して自信をもって英語の表現を練習させたり、明確な発問や指示を出したりすることができるよう、教師の全ての発話部分を明記した台本形式のものとした(指導案参照)。

#### イ 指導資料

題材と国際理解との関連性や、言語材料の扱い方などについて説明し、題材に対して学級担任が理解を深められるようにした。また、必要に応じて学級担任の専門性を十分に生かせるよう各教科等との関連も示した。

#### ウ ワークシート、挿し絵、写真等

学校で印刷してそのまま使えるように、ほとんどの教材をA4サイズで作成した。

これらの3つのコンセプトを柱にして活動を組み立てることが、児童のやる気を引き出し、望ましい小学校英語活動につながると考えた。なお、ここに示した題材は、ALTとのTTでも活用することが可能であり、特に国際理解を深める場面

やコミュニケーション活動の場面などで効果的である。

### 検証授業

協力校に検証授業を依頼し、前述した活動展開例や指導資料、ワークシート等が活動のねらい達

成に向けて役立つものかどうかを検証した。そして、授業及び授業研究会等の結果をもとに活動展開例等に修正を加え、望ましい小学校英語活動を組み立てるためのコンセプトを実現するための方策について提言することとした。なお、検証授業の概要は以下のとおりである。

#### < 検証授業 >

実施時期	題材名	実施学年	活動の様子
平成18年 8月	ニューヨークは今何時？	6年生	アメリカ大リーグの衛生中継の様子を手がかりにして、ニューヨークと日本との間に時差があることを知った。その後、ニューヨーク以外の都市にも興味を示し、時差時計を使いながらいろいろな都市の時間を積極的に調べていた。 【主な英語表現】 What time is it in New York now?
平成18年11月	「てんぷら」の生まれ故郷は？	5年生	友達との会話を通して「シュークリーム」、「テンポ」、「レントゲン」など身近に使われている外来語の由来を調べていた。最後に、必要以上に外来語を使うことの不自然さや日本語の良さにもふれていた。 【主な英語表現】 Where are (シュークリーム) from?
	これは、どこの国旗？	6年生	世界に70以上ある「太陽や星、月など天体を扱った国旗」の中からいくつかの国旗を選び、それぞれの由来を調べた。児童は、いろいろな国の人々の思いにふれたり、環境や生活について考えていた。 【主な英語表現】 Is this the sun?
平成18年12月	牛肉は好きですか？	6年生	「牛肉は好きですか。」などの質問を英語で言いながら様々な国の食文化の違いを調べ、宗教や環境の違いについて考えた。また、刺身や寿司の例を取り上げながら日本食の良さについても考えていた。 【主な英語表現】 Do you like beef?
	新学年はいつから？	5年生	世界各国の学校が新学年を迎える時期について調べ、世界では「9月始まり」が最も多いことや、南半球の国では季節が異なることを知った。最後に、各国の学校のことについて分かったことを日本語で発表した。 【主な英語表現】 When does school start?
平成19年 2月	外国のジャンケンに挑戦しよう！	6年生	東アジアや東南アジアを中心に世界にはいろいろなジャンケンがあることを知り、英語を使って友達を誘っていた。また、それぞれの国のかけ声でジャンケンを行うことで英語以外の言語にもふれることもできた。 【主な英語表現】 Let's play janken.

1 3つのコンセプトは実現したか

(1) 5・6年生の知的好奇心を刺激することができたか

国際理解を重視した内容を取り上げ、ワークシートに示された異なる情報を児童に与え、お互いの情報に興味をもてるようにした。例えば、「こ

れは、どこの国旗？」という題材では、一人一人の児童が異なる国旗を持ちながら、太陽や月などそれぞれの国旗に描かれたデザインについて質問したり教えたりすることで、デザインの由来や国旗制定の理由などに興味を示していた。とりわけ、ある特定の地域において同じ星座が描かれている



ことについては大きな関心を寄せていた。実際に英語を使う場面では、デザインされたものが何であるのかを確認しただけで、全ての疑問が解決したわけではなかったが、活動の後も多くの子童が、様々な国旗に対して興味や関心をふくらませていった。他にも、食べ物や外来語など日ごろ身近に感じているものや、他教科との関連が深いものに興味を示していた。また、コミュニケーション活動においても、英語を情報伝達のための手段のひとつととらえ、英語を使って意欲的に新しい知識や情報を得ようとする子童の姿が随所に見られた。これらのことから、高学年の子童の知的好奇心を刺激することができ、5・6年生のやる気を引き出せたものと考えられる。

### (2) 国際理解重視の活動が行えたか

子童は、活動を通して様々な観点から国際理解を深めることができた。各国の新学年を扱った授業では、各国の新学年が始まる時期を調べることで、学校生活が国や地域によって異なることやその良さについて知ることができた。また、食文化の違いを扱った授業では、いろいろな宗教の考え方を尊重したり、日本の食文化の良さについて見直したりする場面が見られた。



一方、現場の教師に対しても国際理解を深める英語活動の在り方について、十分に伝えることができた。

ただ、指導内容が多すぎることで、コミュニケーション活動にかかる時間が少なくなってしまったり、教師の指示がぶれたりしたことなどから、指導内容を精選することの必要性を感じた。

### (3) 学級担任が自信をもって指導することができたか

活動展開例が台本形式になっていたことで、学級担任はそれぞれの指導場面で安心して指導に当たっていた。そのため、個に応じた適切な指導、支援を行う余裕も見られた。実際に指導に当たった学級担任からも活動展開例や指導資料等があったために指導しやすいとの感想を得ることができた。このように、子童の実態を最も的確に把握している学級担任が自信をもって指導したことで、必要に応じて子童の興味や関心に応じた話題を取り上げたり、子童の反応を見ながら一人一人の個

性を生かしたりするなど子童の実態を十分に把握し臨機応変に対応する場面が随所に見られた。そのことにより、子童も個性や持ち味を十分に発揮でき、より一層やる気をもって取り組んでいた。

## 2 検証授業全体を通して

### (1) 指導する際の留意点

検証授業を通して、次のことに留意する必要があることが分かった。

どのような知的好奇心をどのように刺激するのかを、「ねらい」と「指導資料」をよく読んで明確にしておくこと。

子童一人一人が、具体的に何をどのように理解し、どのような思いをもつことが国際理解を深めることにつながるのかを指導資料等をよく読んで明確にしておくこと。

上記の内容について、子童一人一人の実態を踏まえて指導の構想を練っておくこと。

### (2) スキルの扱いについて

国際理解を重視した英語活動の中で、スキルをどの程度扱うべきか、あるいはどのように扱うべきかという観点からも検証した。なぜなら、従来の英語活動のほとんどが、英語のあいさつや歌、ゲームなどで始まる形をとっており、学校現場の教師にとって、活動の中でスキルと国際理解とのバランスについてイメージすることが難しいと考えたからである。

全ての検証授業を通して、「スキル重視ではない英語活動」について、次のような考えに至った。

コミュニケーション活動を行う前に英語表現の練習は取り入れるものの、実際の会話の場面では、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を優先し、いわゆるフルセンテンスといわれるような正確な言い回しや、正しい発音のみを求めないようにするものである。

スキルを重視しないということは、言語材料の練習を一切行わないということではない。子童が自信をもって積極的にコミュニケーション活動に取り組み国際理解を深められるよう、ある程度の練習は必要であると考えられるが、あくまでも国際理解や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を重視することが大前提である。従って、児

童が英語を使用する際に、英語の正確さなどを決して求めない教師の姿勢が大切である。つまり、教師がしっかり活動のねらいを踏まえた上で、英語表現の練習の位置付けを工夫する必要があるのである。

### (2) コミュニケーション活動について

全ての活動において児童の知的好奇心を刺激し、なおかつ国際理解を深められるような内容を扱ったため、意欲的に活動する児童の姿が随所に見られた。

また、「Excuse me.」で話し始め、会話の最後に、「Thank you.」と言うなど、相手を気遣ったり思いやりするためのコミュニケーションを図る上でのマナーを身に付けることもできた。

### (3) 文字の扱いについて

コミュニケーション活動で用いる言語材料を黒板やワークシートに示しておくことで、児童がその後の活動を円滑に進められることが分かった。ただ、原則として読む指導は行わず、英文を見せる程度であるが、児童なりに音声と文字を結びつけて言語材料を安心して使っている姿が見られたのである。すなわち、児童は耳と目を使って言語材料を自然に使っていたのである。ただし、このことについては十分に調査研究を行っていない領域であり、検証授業を通して児童の姿から感じたことである。



### 提言

1 次の3つのコンセプトを柱に組み立てた活動が、5・6年生をやる気にさせる望ましい英語活動の姿である。

- (1) 知的好奇心を刺激する
- (2) 国際理解を重視する
- (3) 学級担任が自信をもって指導する

2 3つのコンセプトを実現させるためには、次の考えに沿って活動を組み立てることが大切である。

### (1) 知的好奇心を刺激する

英語活動に対する高学年児童の意欲の低下は、活動のマンネリ化に起因している場合が多い。そこで、高学年児童のこれまでの生活体験や各教科等における学習経験と関連させながら、「どうしてそうなるの?」「もっと知りたい。」「なるほど、そういうことだったのか。」というような思考を働かせることができるような活動を組み立てることが大切である。現状における、年間の活動時数を考えると、1単位時間の中で、児童がそうした思考を働かせることができるように指導方法などの工夫をする必要がある。

例えば、それぞれの児童に知的好奇心を刺激するような国際理解に関する異なる情報を与え、コミュニケーション活動を通して児童の知的好奇心が満たされるような工夫をすることが考えられる。

### (2) 国際理解を重視する

国際理解の一環としての英語活動を通して、英語や外国の人への違和感を取り除き、慣れ親しむことは大切である。しかし、今後我が国と諸外国との関係がますます緊密になることが予想される中では、小学校段階から一歩進んだ国際理解の視点を取り入れる必要がある。それは、我が国の伝統や文化を理解し、日本人としての誇りをもち、さらには、単に外国語を話せるだけでなく、外国の生活や文化、外国の人の考え方などをしっかり理解した上で、外国の人と付き合っていける資質・能力を養うことが必要だと考える。

そのために、例えば各国の国旗に対する思いや願いにふれるなど、小学校高学年にふさわしい一歩進んだ国際理解の視点を踏まえた題材内容を工夫することが必要である。

### (3) 学級担任が自信をもって指導する

児童一人一人の実態を把握している学級担任が中心となって指導することが、個に応じた指導・支援を行う上で必要である。児童は、個に応じた指導・支援によりやる気を出すものである。また、今後ALTとのTTの他に、学級担任が単独で英語活動を指導する場合が増えることも想定できる。こうしたことから、校内研修や地域の教育研究所などの研修においても、学級担任にとって使いやすく、なおかつ自信をもって指導できる活動展開案等を作成する必要がある。

ある。

#### 今後の課題

国際理解を深めるといふねらいを達成するために、相手もっている自分とは異なる国際理解に関する情報を得ていくという方針で行ってきた。今後は自分の気持ちや、思い、感情などを伝え合う内容でコミュニケーション活動を行う中で、国際理解の内容を踏まえた活動例を開発していくことが必要であろう。

#### Web 検索キーワード

【総合的な学習の時間 英語 英会話 国際理解 コミュニケーション】

#### 主な参考文献

- ・小泉 清裕 著  
『みんなあつまれ小学生のえいごタイム』  
アルク(2002)
- ・東後 勝明、小泉 清裕、河野 典子  
角田 明、Scott Bronner、Tom Merner 編集  
『JUNIOR COLUMBUS21』 光村図書(2004)
- ・文部科学省 『小学校英語活動実践の手引』  
開隆堂出版(2001)

#### < 共同研究者 >

グループリーダー 田村 充  
主任指導主事 町田 志伸(研究チーフ)  
指導主事 清水 雅文 武藤 一幸  
小林 努 加藤 仁子  
長期研修員 宮崎 岳彦 黒澤 寿一